

「文字と絵」研究序説

乾 善 彦

I. 言語研究における文字研究の位置づけ

言語 (langue ; language) にとって、書記 (écriture ; writing) は決して必須の要素ではない。したがって、言語を構成するひとつの要素であるということとはできない。書記、つまりことばを書きしるすことについて、ソシュールの次のような言説は、書記の研究にとって、つねに考えておかなければならない重要な指摘である。

言語と書とは二つの明かな記号体系である；後者の唯一の存在理由は前者を表記することだ；言語学の対象は、書かれた語と話された語との結合である、とは定義されない；後者のみで対象となすのである。小林英夫訳『一般言語学講義』（1940、岩波書店、初訳1928、岡書院）

ソシュールの言語観にたてば、言語研究からはじきだされることになる書記研究（あるいは書記の基礎となる文字研究）だが、ソシュールは決して「ことば」の研究から書記を切り離そうとしたわけではない。言語研究対象として「langue」を措定することで、それ以外の「ことば」の要素を対象から切り離しただけである。言語 (langue) を言 (parole) と区別することで対象を限定し、共時的研究を通時的の研究と区別することで研究方法を限定することによって、つまり、言語研究の対象と方法をきわめて限定することによって、言語の本質を見出そうとした、その結果の、つまり方法的な措置にすぎない。したがって、言語ならぬ「ことば」(langue と parole をあわせて考える langage に相当する) の研究、とくにその通時的研究において、日本語の場合、漢字と仮名を用いて複雑に展開してきた日本語表記は、「ことば」の歴史、あるいは「ことば」の変化と決して無縁でなく、書記研究が「ことば」の研究の中に位置づけられるのは、むしろ当然のこととしてあった。書記が「ことば」の変化に与えた影響の大きさは、日本語と漢字の場合、西洋言語学では考えられないような、甚大なものであったと思われる。日本語においてこそ書記研究は重要な「ことば」の研究の一分野なのである。

西洋言語学における言語研究の方法は、近年、変形文法、語用論、認知言語学、

社会言語学、ポライトネスといった、ソシユールが限定した言語研究の対象の範囲外の研究が隆盛となってきた。書記の研究においても、ソシユールのいう言語外要素まで含めて考えるとき、さまざまな新たな課題が想定できる。「ことば」と絵との関係もそのひとつである。

Ⅱ. 文字研究の外延

Ⅱ-1. きっかけとしての「画咄」

文字はことばを書きしるすことで、文字としてある。逆にいえば、ことばを書きあらわさないかぎりにおいて、文字は単なる平面図形にすぎない。絵や模様とことなるところはない。ただ、文字によって書きしるされるのは「ことば」そのものではない。ことばを構成する要素のごく一部である。したがって、文字はことばを厳密にはあらわしえない。また、文字によってあらわされたことばが、つねに伝達の用をはたしているかといえば、そうでもない。時間と場とを共有しないかぎりにおいて、ことばを共有しえないことは、日常の経験としてある。先に取り上げた画咄の資料は、そんな書記の場を考えるのに有効な資料であった（拙稿「画咄作品群の資料性―「文字と絵」の研究にむけて―」『国語語彙史の研究三十五』（2016、和泉書院）、以下、前稿とよぶ）。そこでは近称指示語がもちいられ、場を離れては機能しない語が、聞き手の前で絵をかきながら話を進めるという、場を共有することでのみ、伝達機能が有効にはたらく。したがって、それがテキストとして文字化される場合には、文中にその絵を含まざるをえない。次の『画ばなし当時梅』（文化七 1810 年刊）の凡例は、その画咄のしくみを説明するものであるが、このことをよくあらわしている（以下、文中の絵を〔絵〕でしめす。〈 〉は小字割書き）。

去富貴人某町を東へ如是鬢をして行といふて〔絵〕〈如此かき〉又同じ体なる人〔絵〕如是鬢にて西へ行くとて行違ひに口論に成つたといふて〔絵〕〈如此前後二ツになる〉扱其辺の富貴人是を見兼て又〔絵〕こんな鬢にて出挨拶をする〈といふて〉〔絵〕〈如此三ツになす〉其挨拶にて丸う済だれば〈といふて其中へ〉〔絵〕〈をかいて〉〔絵〕〈如是なし〉元のごとくに成つたト落す也

『画ばなし当時梅』（文化七 1810 年刊）

ここでは、近称指示の「如是」が〔絵〕を指示している。したがって、文中に

[絵] が含まれなければ、ことばとして成立しえない。つまり、文中に [絵] を含めてひとつの文脈を構成しているのである。文字ならぬ絵が、書かれたことばの一部を形成しているのである。

文字の機能をことばを書きしるすとしたとき、文字という体系に属さない平面図形、たとえば絵のようなものが、文字とあいまってことばをあらわすことは、たとえば、明恵上人の『夢記』にもみとめられるし（前稿）、近世の判じ物や近年の携帯メールなど、身の回りを見わたせば、日常にいくらでも例をみることができる。従来から指摘されている文字の二面性、つまり体系性と機能性という観点に立つならば、ことばを書きあらわす絵というのは、体系面では文字たりえないが、機能としては文字と同じ機能をもつと理解できるのである（拙著『漢字による日本語書記の歴史的研究』（2003、塙書房）第一章第一節参照）。だとすると、文字研究の範囲も、両側面を兼ねそなえたものだけを対象とするのではなく、一方の側面だけのものにも広げて考えることが必要になるであろう。

従来、文字とことばとの関係を明らかにするためには、まずは、厳密に対象を規定して考えることが必要であった。それは、ソシユールが、まずは langue を共時相においてのみ言語研究の対象としたのをうけてのものであった。そしてそれは、当然ありうべき方法であったと思量する。そしてそれで、ある程度の成果をえていると考える。その成果をうけて、範囲を広めることによって、さらに文字・書記の研究を展開させることができると思われるのである。ちょうど、近時の言語研究がそうであるように。

II-2. もうひとつのきっかけ「狂字図句」

近世期の文字資料のひとつとして、文字絵がある。ただし、文字絵自体は近世期に限定されるものではなく、たとえば、平安時代以来の筆手も文字絵の一種であり、筆手はさまざまの意匠として、工芸や服飾の分野でも用いられる。

ここに紹介する万亭応賀著・一立斎広重画『新法狂字図句画（しんほうきやうじづくゑ）』（弘化元（1844）年刊）は、ことば遊びの資料のひとつである。ことば遊びについては、文学研究の方面で、小野恭靖の積極的な紹介があり、『ことば遊びの文学史』（1999、新典社）、『ことば遊びの世界』（2005、新典社）、『ことば遊びへの招待』（2008、新典社）、『ことばと文字の遊園地』（2010、新典社）などに多くの資料が紹介されている。本書もその中で紹介されている資料である。

「狂字図句画」というのは、文字を絵の中に取り込んで句をよむものであり、たと

えば「可」の字を名札箱（新年のあいさつにきた人が名札を入れるために門前に置かれる箱）に見立てて、絵には新年のあいさつにきた武士が箱に名札を入れている絵があり、「可」の字で門の一部と箱とが描かれている。次の句が添えられる（引用に際しては、各図句絵に通し番号を付し、ルビを（ ）に示し、絵となる文字の左の□の傍線は、その字を□でかこむことにする。また漢字字体はおおむね通行の字体に改める）。

1 はつ春や門（かど）にいれ^可（べき）名札箱（なふだばこ）

このような狂字図句画が六十句（一面二句、都合十五丁）おさめられている。絵に見立てられる字には、漢字・ひらがな・カタカナがあり、六十句のうち、うちわけは漢字三十八句、ひらがな十八句、カタカナ一句、合字・略字三句となっている。カタカナは「ウミ」を舟の帆と波に見立てたもの。

40 小春（こはる）日や^ウミの白帆（しらほ）は貢船（みつぎぶね）

[絵]は浜辺より海の方を見つめると「ウ」が三つ、白帆がえがかれる。分題では「ウミ」となっている。たしかに、帆の下方には波が短い線でえがかれており、ところによっては「ミ」ともみえなくはないが、句の本文の左に絵を示す傍線が「ウ」になっているので、一応、「ウ」だけが文字絵になっていると理解しておく。

カタカナの「ウ」を舟の帆に見立てるのは、『画咄当時梅』にすでにみられる。

跋 一九画述

千年の松よりもまだ高燈籠（たかとうろう）[絵1 = ウが品字様に三つならぶ]（うみ）船見れば沖（おき）の片（かた）かな／＼詠めはそれは画咄してはない文字じや「イヤ是も目出度墨の画しや [絵答 = 「高」で高燈籠、下方に「千年」をたくさん書いて松林、沖には「ウ」が三つで船の帆]（50）

ひらがなの中では、「ぬ」で鼠をえがくものがある。

31 長（なが）き夜（よ）をともに眠（ねむ）ら^ぬねづみかな

これも『画咄当時梅』に次のようにある。

むかしから人のしつた古鼠（ふるねづみ）[絵1 = ぬンぬン] と出る / ちの
[絵2 = のら] ねこめが手がしらしおつた「なんぼのらでも鼠（ねづみ）はカナ
ワぬ [絵答 = 「ぬん」 でねづみ、二匹ある。「のら」で猫一匹。] (10)

また、ひらがな「ぬ」で鼠をえがくのは、『画咄当時梅』以前に、曲亭馬琴『无筆
節用似字尽』（寛政九（1797）年刊）にみられる。

[絵 = 鼠] 〈怒（ぬ）〉 [絵 = 亀] 〈南（みなみ）〉 [絵 = 兎] 〈雨（あめ）〉 〈絵 = 鷹〉
〈乃（の）〉 (16)

ぬはねづみ みなみはかめに あめうさぎ つえつきの、じ あしのないたか

合字・略字は手紙文によくつかわれる「まいらせそうろう、かしく、メ（しめ）」
である。「まいらせそうろう」は巻頭の付録にも、虚無僧の絵に葦手様に「そんしツ
[略字 = まいらせそうろう]」がえがかれている。「ト[略字 = かしく]」で梅の花を
えがくのも、『无筆節用似字尽』にすでにみられる。

[絵 = 猿] 〈略字 = さま〉 [絵 = 梅] 〈略字 = かしく〉 [絵 = 簪] 〈漢字 = 文〉 [絵 =
鳥の脚] 〈略字 = 候〉

さまはさる 梅のつぼみは かしくなり 文はかんざし そろ鳥のあし (1)

漢字で鶴をえがく次の図句画も、『无筆節用似字尽』にみとめられる (5)。

19 空（そら）に舞（ま）ふ鶴（つる）長閑（のどか）なりはつ日（ひ）の出
（で）

漢字の図句画では、

3 人々（ひとびと）の願（ねがひ）や田（かなふ）高燈籠（たかとうろ）

の意匠は『画咄百の笑』（文化八（1811）年刊）にすでにみとめられる。

これら、狂字図句画のできについては、巻末の「狂字図句画工様の次第（きやうじづくゑたくみやうのしだい）」に、次のようにある。

狂字図句画（きやうじづくゑ）工様（たくみやう）の次第（しだい）

此道（このみち）に遊（あそば）んとおもはゞまづ文字（もんじ）の直（すぐ）に画（ゑ）と句（く）の意（い）に通（つう）ずることを工風（くふう）すべし。此はへたゝき 人の笠これなぞは一字（いちじ）よく両道（りやうだう）におよべば上とすべし。しゆもく丁これなぞは画（ゑ）にのらずといへども中（ちう）なり。雪の傘このたぐひはたゞ傘（かさ）の字（じ）傘（かさ）に見（み）ゆるまでにて狂（きやう）うすし。この外（ほか）あながちに文字（もんじ）をこしらへて画（ゑ）にする句（く）はいやしくして下（げ）也。余流（よりう）にためしなきことながら此道（このみち）にてはたとへば猿廻（さるまは）しの句（く）をいふにも「風呂敷（ふろしき）を背負（せよへ）ばおぶさるなぞとことばのうちにて題（だい）のこもることを上とするなり。さて句（く）ごとに切字（きれじ）をすへしは俳句（はいく）に近（ちか）づき狂句（きやうく）に遠（とほ）ざからんが為（ため）也。猶（なほ）二編（へん）の巻（まき）にはさるまわしのたぐひをことごとく出（いだ）して余流（よりう）に異（こと）なる風俗（ふうぞく）の狂（きやう）をしらしむべし」（二十才）

この判断は、本稿の範囲外にあるけれど、文字遊びがある種、風流のおこないでもあったことがしられる。絵と文字とが巧みにまじりあった世界が、そこにはある。

II-3. 文字絵と文字遊び

『新法狂字図句画』の巻頭には、次のような付録が掲げられる。さながら、文字遊びの歴史、あるいは紹介となっている。

①歴代（れきだい）の文字（もんじ）

竹書（ちくしよ） 嘉（よろこぶ） 勉（つとめる）

梅花（ばいくわ） 省（かへりみる） 躬（み）

古代（こだい）の文字画（もんじゑ）

きのふの姫（よめ）はけふのばさま 姑（しうと）が短（みじかき）をいふ
事なかれ／甲陽／素鏡」（一ウ）

② [文字絵=人丸]

大心七十四翁 紫野（むらさきの） 大心和尚（だいしんおしやう）の筆
（ふで）

[文字絵=虚無僧]

そんしし[略字=まいらせそうろう]

[文字絵=へмамシヨ入道]

へмамシヨ入道（にふだう）」（二オ）

[文字絵=へのへのもへじ]

へのへのもへいじ

③画兄弟（ゑきやうだい）

ほうづき

山水天狗

あんま」（二ウ）

④謎歌（なぞうた）

題 こいしく

ふたつ文字（もじ）うしの角（つの）もじすぐなもじゆがみもじとぞ君（きみ）はおほゆる

⑤見立発句（みたてほつく）

片足（かたあし）はやつし候（そろ）なり小田（をだ）の雁（かり）／其角
乙鳥（つばくら）や滝（たき）に梵字（ほんじ）の身（み）のひねり／嵐雪
蚊屋（かや）の手（て）を一（ひと）ツはづして窓（まど）の月（つき）／
千代

⑥どん字

題 夫（おほみそか）

夫（おほみそか）まう一日（いちにち）で春（はる）になる」（三オ）

⑦画（ゑ）ばなし

屋敷のまどにはなぜかよこに一（ばう）がありますがありやアどういふわけ
でござりますな／「さればあのまどについてはなんぞ曰（いわく）があらうよ

⑧画判事（ゑはんじ）

題 きりぎりす [絵] 題 すゞむし [絵]

⑨画地口（ゑぢぐち）

達磨大師（だるまだいし）の茶（ちや）せんのかたち [絵]」（三ウ）

⑩絵文 (ゑぶみ)

〈絵手紙 てがみをもつてけいじやうつかまつりそろぢぶんからかんきつよく
ごぞそうらへとも〉

⑪七福神七ツ道歌 (しちふくじんなゝツだうか)

よろこ〔絵=琵琶〕いつ〔絵=鹿〕〔絵=鉾〕るう〔絵=巻物〕うち出る〔絵
=小槌〕の〔絵=団扇〕めて〔絵=鯛〕／□春応賀吉書

⑫画直 (ゑなほ) し

題 士〔絵〕 題 山〔絵〕 (四オ)

これらの文字遊びについては、先掲小野諸書に詳しい。本文に入る前にさまざまの付録を収載することは、江戸時代に流通した節用集類の百科事典的な性格に通じるものがあるが、ここでは、『小野篁歌字尽』のパロディーである式亭三馬『道外節用 小野篁諺字尽』(文化三(1806)年刊)にその類例をみたい。『小野篁歌字尽』は、やはり江戸時代に流通した、漢字を類によって集め、それを歌によって覚えるように工夫した、幼学書のひとつであるが、このパロディー本は、多岐にわたる(参照、拙稿『『小野篁歌字尽』とその周辺』(関西大学アジア文化研究センター ディスカッションペーパー 11、2015.8)。そのうち本書は、比較的『小野篁歌字尽』に近い形態のパロディー本であり、「諺字」本編の前と頭書とに、節用集類の付録のパロディーが収載されている。その中に、さまざまの文字遊びも含まれる。文字と絵とに関するものとして、「大篆／小篆／似字尽」「五性書判」「難字和解」「編冠構字尽」「おいらんだ文字」「稀有／化原／異類異名尽」「どういふもんだ痕紋図説」などがあげられる。

「大篆／小篆／似字尽」は、篆書の字形を絵に見立てるものであり、たとえば、「酉」は「さとうつぼ」、「五」は「今戸やきのあねさま」、「四」は「奴だこ」といった具合である。文字絵の一類として位置づけられる。

「五性書判」は花押を絵に見立てるものである。〔花押=ソレちいさんののら廻り／おさるの木のぼり／木性に吉〕、〔花押=ゐのきの舟のいちはやく□ハ／水性に吉〕などがあり、節用集の付録の花押鑑のパロディーとなっている。

「難字和解」は漢字の難解なヨミのパロディーで諺字に似た作りとなっている。「和七(とだな)／大和の和(と)七夕の七(たな)」「屁屁(へつつい)／屁(へ)を対(ついで)に書(か)く」「〔諺字=情の下半分だけ書く〕日目(さけかめ)／情(さなけ)が半分で〔絵=同前(さけ)〕、何日目(いつかめ)の日目(かめ)、是が

酒瓶（さけかめ）なり」、「十六〔謔字＝皆をさかさまに書く〕（いざなみ）／十六夜（いざよひ）の十六（いざ）、皆（みな）がひっくりかへる」といった類である。

「編冠構字尽」は、節用集や往来物に定番の付録であるが、ありそうな偏旁冠脚の形を絵に見立て、それに解説の絵と文とをそえてある。たとえば、「あとへん〔絵＝草書の足偏〕／こうくはいさきにたゝずとかくものごとがあとへんにはこまる〔絵＝指を足偏の形にして頭に置き困った様子の男〕」といった具合である。

「おいらんだ文字」は「オランダ文字」に代表される西洋文字のパロディーである。

おいらんだは牛（うし）のよだりを見て文字（もんじ）を製すとかや。おいらんだはしん象（ぞう）のねすがたを見て文字を作るといへり。故に字のげうぎわるく中にもかな釘（くぎ）の折レをもつて書くものあり。余国（よこく）の人につうじがたし。又一説（いつせつ）に蚯蚓（みゝず）ののたくるを見て作りしともいふ。文字横（よこ）にゆくは色客の法（ほう）にしたがふ。一チ名（めう）おいらんだ紋日（もんひ）と云

として、「啞唎弁須（ありんす）の詞（ことば）」「ターツミッタ詞」の二種類の文字によって書かれたことばをのせる。

「稀有／化原／異類異名尽」は、かわった人名を集めたものである。「〔謔字＝七の二画目の縦棒が横棒からはじまり、つきぬけない字〕／上江傳七（うへえでんしち）／上（うへ）へあたまのでぬ七（しち）の字ゆゑ」は、謔字のなぞ。「十／豎横十太（たてよこじうだ）／豎（たて）からよんでも横（よこ）からよんでもこいつは十（じう）だ」は既存文字のなぞ。「平平平平（ひらだいらひらへい）」「一二三四五六（ひふみよごろく）」などは、『小野篁歌字尽』にみられる、小野篁の「子子子子子子子子子子子子」の謎解きに通じる名前のなぞである。

「どういふもんだ痕紋図説」は手のひらの手相の種類のパロディー。その中に文字にみえる手相がいくつもある。手のひらに「ヨタカ」とあるのは、廿四紋（にじうしもん）、「門」を丸くしたのは「大紋（おほもん）」、「心」は「註紋（ちうもん）」、「子曰」は「学紋」といった類である。

これらの詳細については、稿を改めることになるが、近世期を通じて継承されているさまじまの文字にまつわるパロディーは、文字遊びのひとつの世界を構成している。文字がことばを書きしるすという機能を離れて、あるいはその機能を拡張す

ることで、ある意味、通常とは異なることばとの対応を具現している。ソシユールのいわば想定外の文字（書記）とことばとの関係がそこにはある。これも文字研究の一分野として考えられなければならないだろう。

Ⅲ. 文字生活史という研究分野

絵と文字とは、つねに、さまざまなメディアにおいて補完的であった。古くは、『現在過去因果経』では、上段に絵画、下段に経文が配されて、一つの経巻を構成している。また、装飾経の見返りには、荘厳な絵が書かれている場合が多いが、中には平家納経のように葦手を含むものもみとめられる。仏教世界では、壁画や天井画等、絵画が荘厳に供されるが、つねに絵画と経典は、仏教教学とともにあったのである。

三宝絵は、三宝にまつわる説話、つまり仏教説話集のひとつであるが、文字通り本来は絵とともにあった。前稿にもとりあげたが、東大寺切に絵を解説した部分が残る。説話が絵とともに享受されるすがたが、ここにもみとめられる。その延長上に絵解きや絵をかけた説法がある。

ひらがなを中心とする和歌・和文の世界でも、ことばと絵とはつねに補完的にあらわれる。たとえば、屏風歌は屏風に書かれた絵を題材として歌われたものである。（この淵源には、物の名歌があるのだろう。万葉集巻十六におさめられた長思寸意吉麻呂歌八首は、夜の宴席においてまわりにある雑物を歌によりこんだものであり、そのような営為の線上に物の名歌、さらに屏風歌を考えることができよう。ここにも言語生活にかかわる問題を設定できる。）

物語が絵と密接な関係にあることも、前稿にふれたとおりである。付け加えるならば、『宇津保物語』にみられる絵解き、あるいは絵指示とよばれる部分は、物語の読解が絵とともにあったことを物語る。そこには絵とともに物語が享受された場面が思い描かれる。

このように見てくると、絵とことばによって構成される場の研究が、文字研究の一分野として想定されてくる。

このようなことばと絵によって構成される言語場を、言語生活という言語研究の一分野として取り上げたはやいものに、時枝誠記『言語生活論』（1976、岩波書店）がある。この書は時枝の死後まとめられた論文集であるが、「国語史研究の一構想」（1949）ほか「言語生活史」に関する論文を含む。時枝が言語生活を考えたの

は、言語過程論からすれば当然の方向だったと思われる。言語を langue の面ではなく、langage の面からとらえようとしたのが、言語過程論の基本であったからである。そこでは、話す、聞く、書く、読むといった「行為」自体が言語研究の一分野として想定された。さすれば、ソシユールの限定した言語研究の対象外に言語生活という研究分野があることになる。その通時的研究である言語生活史においては、なおのことソシユール言語学からは遠いところにあるといわざるをえない。

橋本四郎「古代の言語生活」『講座国語史 文体史・言語生活史』（1972、大修館書店、のち『橋本四郎論文集 万葉集編』（1986、角川書店）所収）は、言語行為を表現する語彙を詳細に分析することで、古代の言語生活を記述しようとする。そこにあらわれる語彙は、言語行為だけでなく、書記行為全体に及ぶ。だとすると、絵をかく行為も言語生活の一端になうことになろう。みてきたように、絵とことばとは、補完する関係にあったのだから。文字と絵とにまつわる言語生活史、文字生活史を構想するゆえんがそこにある。これが本稿で述べきたった「文字と絵」研究的方法的基盤となる。

最後にもうひとつ、近世の文字生活にかかわる研究課題として、錦絵・浮世絵における文字の位置について、考えておく。言語生活を考えるうえで、生活が描かれた絵画資料は貴重な資料である。美術史の方面では、絵と文字にまつわる展覧会などが開催されたり、錦絵・浮世絵の中の文字の役割についての言及があった。寺子屋のようすがえがかれたり、手紙をみる美人画であったり、屏風に書かれた文字がある種の役割を果たしていたりする。また、絵と文章とで構成される錦絵は少なくないばかりか、ほとんどの場合、文字を含むとってよい。だとすると、文字の側から絵を見るということがあってよい。また、ことば遊びの面でも、判じ絵や猫が文字を構成するといった作品など、多種多様の文字と絵との関係が報告されている。しかしこれらが、日本語史研究の中で活かされてきたとは考えられない。今後、美術史との連携も含めて、言語生活史を構想する必要がある。

(付記)

本稿は、2016年7月2日に開催された、関西大学国文学会における口頭発表を基にしたものであり、2015年度の関西大学国内研究費による成果の一部である。

(いぬい よしひこ／本学教授)